

「海外・帰国」あれこれコーナー：海外の保護者のために

海外・帰国 あれこれコーナー

このコーナーでは、いろいろな立場の人たちの声を聞きながら、特に海外に住んでいる保護者の方々に役立てていただける情報や、参考になる考え方などを提供していきます。

取り上げてほしいテーマ、ご意見、ご感想などをお知らせください。皆様の声を聞きながら、このコーナーをできるだけ実際に役に立つものにしていきたいと思っています。連絡は、Eメールで、sasa@keimei.ac.jp までお願いいたします。



佐々 信行
さっさ のぶゆき

啓明学園初等学校 校長

ハンブルク補習校、帰国子女受け入れ担当（横浜市）、日本語イマージョン・プログラム教諭（バージニア州）、ワシントン補習授業校を経て、現職。

啓明学園 初等学校
東京都昭島市拜島町 5-11-15
代表：042-541-1003
国際教育センター：042-546-5881
www.keimei.ac.jp

「海外生活をしてよかった」と言えるように

海外で生活することになるとき、ほとんどの場合、子どもには選択の余地はありません。帰国する時も同様です。否応無しに、仲良しの友だちと別れ、新しい生活を作っていかなければなりません。それだけに、親としては、子どもたちに「海外生活をしてよかった」と言ってほしいと願います。

私が勤務する啓明学園初等学校にも海外からの編入生がたくさんいますが、小学生は、まだ、客観的に自分の海外生活を振り返って話題にすることは多くありません。海外生活に自分なりの評価をするのはもう少し大きくなってからでしょう。そこで、中学・高校でたくさんの帰国生徒を教えてきた山下先生に、話をきいてみました。

* * *

編入してから1か月、とても元気に過ごしているように見えた中学生女の子が、「取り出し」（注1）の授業に来て、急に顔をこわばらせ、泣き始めました。1か月間精一杯明るくがんばってきたのですが、緊張が限界に来てしまったのでしょうか。1年前に帰国した他の生徒に話を聞いてもらい、「私も去年はそうだった」と励まされて、やっと元気がでたようでした。「国際学級」では珍しくない光景です。

「帰国生」の中には、海外で生まれた子や、海外へ移った時のことは小さかったのであまり記憶にないという子がいます。この子たちにとっては日本に住み始めることは「帰国」ではなく、新しい土地への「移住」ということとなります。日本の学校への編入は、全く新しい世界での生活の始まりです。

比較的短期間海外に滞在した子どもたちの場合も、けっして楽ではありません。帰国した場所が地図の上では同じ場所であったとしても、成長する子どもたちにとっては、元の世界ではありません。海外での生活をきずくためにたいへんな苦勞をしたことが記憶に新しいうちに、また新しい困難を克服しなければならぬということになります。

いずれの場合でも、子どもたちは、自分の意志とは関係なく今までの環境から引き離さ

